

第6部

おわりに

平成30年北海道胆振東部地震

～ 地震災害を振り返って ～

佐藤 雅史 室蘭建設管理部苫小牧出張所 所長

在任期間：平成29年4月～平成30年12月

北海道胆振東部地震について、今後の震災対応の参考としていただきたく、振り返ってみる。

まず初めに、北海道では初めて観測された震度7の地震によりお亡くなりになられた方々、ご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申し上げますとともに、被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

当時苫小牧出張所長であった私は地震発生から、初動対応としてパトロール、通行規制、啓開作業、応急作業、災害調査、災害査定等について2018年12月31日まで苫小牧出張所で対応にあたった。翌1月1日からは室蘭建設管理部に災害復旧推進室を新設することになり、本部に席を移し主に災害復旧事業の調整や渉外対応などにあたった。

2018年9月6日午前3時7分大きな揺れを感じ、物が散乱した部屋をそのままに、直ちに出張所に向かった。事務所内の様子を確認し、今後対応しなければならぬことを頭の中で整理しながら、まずは深呼吸し自らを落ち着かせたことを記憶している。

職員の安否確認をしながら、パトロール出動指示、被災状況の情報収集、これに伴う応急作業や啓開作業の指示、コンサルタントへ被災状況調査の依頼などホワイトボードに書き込み、登庁してくれた職員と直ちに作業に入った。

初動対応では、地震発生直後から各班が速やかに出

動し、管内の被災状況等についてパトロールを行い、逐次報告があり、地震の被害の大きさが見えてきた。想像を遥かに超える被災状況に冷静に対応できるか不安を感じながら、緊張感を持って対応にあたった。

土砂崩落箇所では、道路の啓開作業のため管内の工事箇所から重機をかき集め、被災地に集結させ、建設業協会のご協力により速やかに対応することができた。特に、吉野地区や富里地区が土砂崩落による被害も大きく、自衛隊・警察・消防などで被災者の救助活動が行われ、我々の啓開作業班は救助活動状況を見ながら連携して啓開作業を進めて行った。被災3町では、道路路面の亀裂や橋台部の段差が多く発生したが、橋梁の耐震補強を行っていたため、落橋・倒壊等の大きな被害が無く、救助活動や応急作業を速やかに実施することができた。

災害発生直後の国土交通省防災課による災害緊急調査により対策方針等の指導を受け、北海道では地震災害として初めて「大規模災害時における査定方針」を適用し、災害査定の効率化、簡素化を図り発災から約1か月後の10月10日に第1回の災害査定を受けることが出来た。特に日高幌内川においては、被災箇所も多く、また、土砂崩落で危険な箇所などで十分な測量も出来ない状況であり、「設計書に添付する図面等の効率化」により図面等に代えて航空写真や代表断面にて査

定を受けることが出来、災害査定の準備期間の縮減や作業量の軽減を図ることが出来た。この新たな査定方針により、1 査定設計書としては北海道で過去最高額の約 66.5 億円の査定決定を受け、早期に災害復旧工事が進められ、被災地の皆さんにも目に見える形で復旧を進めることができたと考えている。国土交通省をはじめ、本庁、本部、各建設管理部の皆さんや全国知事会からの応援など、皆さんのおかげで、道路・河川など 130 本を 10 週の災害査定で受けることができました。全道や全国知事会からお応援に送り出していただいた職場の皆さんにもあらためて感謝したい。

今回の災害では初動のパトロールや崩土除去、段差解消など、速やかな応急作業により、救助活動や交通

の確保ができた。余震が続く中、災害調査や短期間での災害査定に関する設計業務など、建設業・測量設計業の協力なくしては乗り越えることが出来なかったと強く感じており、災害時に最前線で地域社会の安全・安心の確保を担う地域の守り手として大きな役割を担っていただいたことに重ねて感謝を申し上げる。災害対応に当たった職員は多くの困難に直面し、その困難に対して皆で知恵を出し合い、「絶対、大丈夫」とみんなで励ましあい、この災害を乗り越えてきました。今回経験した教訓や知識を今後の災害に活かしていただけることを切に願います。

最後に全ての皆さんに「感謝・感謝・感謝です。」

塩田 雅史 室蘭建設管理部苫小牧出張所 所長

在任期間：平成 31 年 1 月～令和 2 年 3 月

平成 30 年 9 月に発生した北海道胆振東部地震の災害復旧に対しまして、全道ならびに全国からたくさんのご支援を頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

○はじめに

平成 30 年 9 月 5 日午後 10 時、台風 19 号の被害状況の整理等が一段落し、30 時間ぶりに帰宅、午前 0 時には就寝。ところが、午前 3 時に地震で飛び起きる。東日本大震災と似た揺れ方に、やや遠方で大地震が起きたのではと考え、すぐに出社準備を整えタクシーに乗車。道路照明が次々と消える中、真っ暗なすすき野を徘徊する若者を横目に本庁舎に到着。

ここから、本庁維持管理防災課道路維持主幹、苫小牧出張所長、室蘭建管災害復旧室長と 3 ポストに渡る私と胆振東部地震災害復旧への道のりが始まりますが、主に苫小牧出張所長として、現場の第一線で復旧を担当した時のことを「振り返り」させていただきます。

○建設部維持管理防災課主幹（道路維持）

登庁後、夜が明けるとともに、被災地厚真町の土砂崩れ現場の映像がテレビで放送され、被害の甚大さに

驚くとともに、道路被災位置や通行規制情報などを収集整理し、災害指揮室に情報を集約するなどてんやわんや。苫小牧出張所佐藤所長とはラインで情報交換を行い、自衛隊や開発局の支援部隊との調整など、道路啓開・通行止め解除に向けサポートを行い、ようやく 12 月になり落ち着いたところで、まさかの苫小牧出張所長への内示を頂き、びっくり仰天しました。

○室蘭建設管理部苫小牧出張所長

新年 1 月 3 日に苫小牧へ引越、4 日の御用始めに、知事会派遣職員 7 名に辞令交付。遠くは佐賀県や三重県から、極寒の北海道へ応援に来て頂き感謝。

1 月から毎週、査定が続き、2 月になってようやく査定が終了。災害復旧事業や災害関連事業等の全体が固まりましたが、なんと 199 箇所、397.5 億円となり、そのほとんどが苫小牧出張所であり、執行体制の確保や執務環境の整備が問題となりました。震災前は、30 名体制でしたが、全道からの応援や知事会派遣職員 11 名、任期付職員 8 名を増強し、平成 31 年度スタート時には 53 名の精鋭部隊で、約 400 億円の復旧事業を進めることとなりました。また、既存庁舎では収まりきらないため、駐車場にプレハブ事務所を増設して、なん

とか執務環境も整えることができました。

いよいよ復旧工事が本格化するところですが、被災地では、道路・河川などの建設管理部が所管する施設だけではなく、農地や宅地、治山施設なども被災しており、各施設が隣接している中で復旧工事を進めなければならないことや、崩土の搬出や工事資材の運搬など工事関係車両の錯綜による渋滞や交通事故、振動・騒音など、様々なトラブルの発生が懸念されました。

そうしたことから、関係機関相互の連絡調整を緊密に行い、労働災害、公害防止対策や交通安全に努め、工事を安全かつ円滑に実施することを目的に、国・道・町の発注者と工事受注業者を構成員とする安全連絡協議会を被災3町ごとに設置しました。協議会会長職は、苫小牧出張所長である私が担うこととなりましたが、ピーク時には厚真町内だけで約180件の工事が稼働しており、苦情対応や交通事故防止など、かなりやり応えのあるものとなりました。

特にピーク時には約1800台/日のダンプトラックが崩土運搬を行っており、スピードダウンの徹底などの活動を行いましたが、工事説明会などの場で地域の方からは、たびたびお叱りを受けました。ごく一部のモノがルールを守らないために、復旧工事に携わる関係者の努力が正しく評価されないことが非常に残念であり、時には厚真町内のすべての土砂運搬を中止し、ルールの徹底を図るなど、地域との信頼関係の構築に苦勞しました。

施工業者さんと合同での通学時間帯の旗振り活動や、苫小牧労働基準安全署と合同の現場安全パトロールを実施するなど、交通事故防止や労働災害防止活動など、様々な活動の成果として死亡事故などが発生しなかったのは、施工業者さんの努力の賜でもあり、大変喜ばしいことでした。

○室蘭建設管理部事業室災害復旧推進室長

紙面の都合でカット

○おわりに

大規模自然災害等が頻発する中、防災・減災に向けた事業の推進や災害復旧事業を担う我々の職場や建設業者さんの役割は益々重要になっております。

平成28年の豪雨災害や胆振東部地震での大規模な災害復旧事業を経験し、若手職員がどんどん頼もしくなっていくのが、大変喜ばしく感じております。

また、全国知事会からの応援に対して、今度は恩返しする場面が出てくると思いますので、若手職員には積極的な支援をお願いします。

最後になりますが、我々の職場は道民の生命や財産を守る大変重要な社会資本整備を行っています。職員一人一人が、この職責に誇りと自信を持ち、今後もいつ、どこで大規模災害が起きるか判りませんが、全道一丸となって乗り越えて行くことが出来ると信じております。ブラボー。

足立 浩 室蘭建設管理部苫小牧出張所 所長

在任期間：令和2年4月～令和4年3月

令和2年3月某日、私は建設部道路課から室蘭建設管理部苫小牧出張所への異動を命ぜられた。直感的にこれは災害復旧工事をきっちり終わらせろということだなと思った。

前々佐藤所長が直撃の被災を受け寝る間も無く復旧に向けた羅針盤を作り、出張所職員をはじめ全国知事会派遣や全道各地から応援に来てくれた方々と約8割の災害査定を終わらせ、前塩田所長が残る災害査定を全て終わらせたほか、大量の土砂の搬出、運搬に係るルールを作り、後は災害復旧工事を完了させることがバトンを受け取った私の任務だった。

令和2年4月1日の着任後、被災3町の災害復旧工事現場を回ったが、復旧のスピードに驚いた。道路、橋梁の被災はほとんどが完成に近づいており、砂防、急傾斜地の被災も多くの現場が近接して錯綜する中で着々と復旧工事が進んでいた。

日高幌内川と厚幌ダムの災害復旧工事は全国的にも極めて希な災害復旧と言っても過言ではない。平成5年の釧路沖地震、平成6年の東方沖地震を釧路土現で経験した私も、地震災でこのような復旧を行うのは初めての経験であった。とにかく土砂運搬の規模が半端ではない。工用道路の新設、土砂仮置き場やダンプの確保、交通安全、近隣住民への振動・騒音の影響を最小限にする土砂運搬ルールの策定、効率的なダンプ台数管理などは、前塩田所長が安全連絡協議会を立ち上げ、建管工事だけではなく直轄砂防や農業、治山など国、道、町全ての災害工事を含め対応する仕組みが構築されていた。それを引継ぎ、安全連絡協議会は、令和2年、3年も継続して苫小牧出張所長が会長を務め、住民からの苦情や舗装修繕の要望など他の発注機関及び各地区部会を通じ、全ての受注企業と調整して対応に当たった。所内復旧チームが毎月ドローンで災害復旧工事の進捗状況を撮影し共有ハードに保存してくれていた。被災直後の状態から復旧の進捗具合が一目でわかる非常に貴重なデータだ。被災した現地状況が毎回変わるのを見るのが私の楽しみとなっていた。

苫小牧出張所所管の災害復旧工事は、令和3年12月現在で発注率は100%、施工中なものは日高幌内川と厚幌ダム、厚真町災害受託工事の赤間の沢川、町道幌内沢線の災害復旧工事を残すのみとなったが、これら被災箇所も今年度内の完成を予定している。

所内職員は全身全霊で頑張ってくれた。一人十数本の工事を発注、監督することは容易ではない。毎夜残業を重ね、気力、体力的にもきつく、愚痴や弱音を言いたいこともあったと思うが、一日も早い復旧に向けて全職員がワンチームとなってこの大災害の復旧に尽力してくれたことに所長として感謝してもしきれない。私が何かしたつもりは毛頭無い。ただ唯一気を使ったのは、職員の健康、メンタル管理だ。時に胃が痛むくらい心配しながら見守っていたが、特に健康を崩す職員が出なかったことは本当にありがたかった。

この胆振東部地震は本道の大災害の歴史に残るものである。地震災の初動対応、査定や復旧工事における様々な考え方は、今後のバイブルになるであろう。被災から3年でここまで復旧が進捗したのは我々発注者のみならず、困難な現場状況の中で卓越した技術力を駆使した管内・管外の受注企業の努力の証であり、特に発災直後の初動において、不眠不休で道路啓開等にご尽力頂いた管内企業には本当に頭が下がる思いである。携わった職員並びに企業の皆さまには、この場をお借りして心から感謝申し上げます。

ここでの経験は、一人一人の一生の思い出と財産になり、今後様々な仕事を成し遂げる上での大きな自信に繋がるものと確信している。

来年度以降、会計検査や災害復旧成功認定検査などの受検がある。楽観的と言われるかもしれないが、私は何一つ心配していない。自信を持って堂々と受検してほしい。

おわりに、このたびの胆振東部地震の被災された皆様に心からお見舞い申し上げますとともに、亡くなられた方々にご冥福をお祈りいたします。

全国知事会の協定に基づく派遣職員の皆様から

～ 災害復旧事業に携わって ～

遠藤 紀彬

派遣元：青森県

派遣時所属：青森県県土整備部道路課

派遣期間：平成30年12月1日～平成31年3月31日

・はじめに

私は青森県から、12月から3月までの4か月の間派遣されました。

当時、入庁7年目で道路補修等の業務経験がありましたが、入庁後、勤務地では大きな被災はなかったため、災害対応の経験がなく、自分の実力に不安を抱えて赴任しました。

しかし、苫小牧の事務所では復旧のための体制が整えられていて、私が何をやるべきかわからないときにはすぐに指示をいただくことができたため、なんとか動くことができました。

また、災害手帳を読むことで経験の浅い私にも必要な手順がわかり、先人たちが被災から立ち直る度に工夫を重ねたことの恩恵を感じました。

・土木職員の派遣は増えるのでは

この度の業務を経験して、短期間の派遣はアリではないか？これから、このような業務形態が増えるのではないかと感じました。

近年、災害が激甚化しているという声をよく聞きますが、一方で人口減から技術者が減り、どこも職員がギリギリの状態であるなかで、緊急時には足りない人手を他地域から招く必要性が増すのではないかと考えます。

最近ではビデオ会議等を頻繁に使うようになり、派遣先から前業務のフォローなどをやりやすくなっているので、急な要請に対応できる人材が増えるのではないかと、何より、私自身の北海道での経験が充実していたことから、積極的に派遣要員になりたいと考える人も多いのではないかと思います。

・視野が広がった

充実していた点の一つとして、業務の経験があります。災害復興自体が、意義を感じやすい業務ですが、それに加えて、この時の経験がその後の業務に生かされている感覚をしばしば感じます。災害査定自体が初めての経験だったので、大変勉強になったのですが、通常の業務に関しても、今まで見過ごしていた点についても見えてくるようになりました。

私は比較的近い地域から来ていましたが、それでも道路の構造などでは多少の差がありました。青森県内でも日本海側と太平洋側などで気候が違うため、管理の方針などにも事務所ごとに特徴はあったのですが、あまり気づいていませんでした。最近では、違いに気づいて疑問を持つことが増えています。

苫小牧でいろいろな地域から派遣されている人たちと一緒に仕事をすることで、普段は考えないことに気づくことができました。その経験があったおかげで、

青森県内での違いにも気づきやすくなったのだと思います。

派遣期間が終わり地元に戻った後に、北海道での思い出を話す機会は多いです。単純に、訪れた地域のことや、食べたものなど話すことももちろんありますが、同僚を相手に仕事の話をする際に、そういえば北海道で気づいたけど・・・と話すこともあります。

・観光もできた

他にも、地元に行きたかったらやらなかったら、ということをやってみるいい機会になりました。

北海道旅行をしてみたいと考えている人は大勢いると思いますが、実際に移動時間や費用を考えると、気楽には行動に移せないと思いますし、私はもともと出不精だったので、この機会が無ければ行けなかった場所がほとんどだと思います。

また、札幌方面や帯広方面への旅行にも行きましたが、現場周辺での食事などや飲み会などでもいろいろな所へ行きました。それらは数日の旅行では回り切れないので、ある程度の期間滞在したからこそ楽しめた点です。お弁当やお菓子などの差し入れもご当地を感じましたし、スーパーの銘柄も地元とは違うので、そのあたりは生活をしてきたからこそその楽しみだったと思います。

・普段通りで健康的な生活

無理をしない環境を整えてもらっていたことも重要でした。

青森県でも、令和3年、4年度には豪雨により道路橋や鉄道橋が被害を受け、国道や鉄道が使えなくなる災害がありました。その際に被災地への派遣や災害査

定の業務を行いました。

被災地の派遣については、ごく短期で業務量も業務内容もそれほどの負荷ではなかったのですが、周囲の環境に慣れていないこともあって、普段よりも疲れを感じました。環境が変わって、オフの時間にうまく気晴らしができなかったことも疲れの原因になったと思います。

そのような経験をしたうえで苫小牧での勤務のことを思い出すと、しっかりと普通の日常となっており、ストレスを受けずに生活できていました。

仕事中に適度に会話ができて、過度に緊張せずに仕事に向き合えたことは、長く仕事をするうえで特に重要だったように思います。

苫小牧市は青森市よりも気温が低く寒かったこともあり、洗濯機の排水部分が凍結するといったトラブルもありましたが、おおむね快適に過ごせました。雪があまり降らなかったのも、青森にいるよりも快適だったかもしれません。

また、休日にはプロパーの職員の方や、同じく知事会からの派遣職員の方が遊びに誘ってくれたおかげで、上手に息抜きをすることができました。

コロナ禍で外出できない時期を経験すると、休日に職場や家以外の場所で過ごすことや人との交流は、思っていたよりも大切な時間だったことに気づきました。

・おわりに

以上のように復旧の仕事もできて、休日はレジャーも行うことができて、実質ワーケーションでした。

業務に関してもプライベートでもいろいろな経験させていただきました。この度の経験を大事にしたいと思います。

山西 龍馬

派遣元：秋田県

派遣時所属：秋田県由利地域振興局建設部企画・建設課

派遣期間：平成30年12月1日～平成31年1月31日

この度は、記録誌作成に伴い、コメントを寄せる機会を設けて頂き誠にありがとうございます。私は平成30年12月から二ヶ月の派遣期間、主に道路災の査定準備、受験を担当しました。

北海道胆振東部地震は当時報道でも大きく取り上げられていたため、着任前より現地状況を知っていたつもりでしたが、実際の現場を目の当たりにすると、崩壊した家屋や原形を留めていないほど破損した車両、家屋

から流出した生活用品等が未だ片付けられておらず、生々しい被災現場は想像を遙かに超えており、改めて自然災害の脅威というものを強く感じたところでした。

非常に短い期間の派遣ではありましたが、北海道での現場経験は、自分にとって何より得がたいものとなりました。

さて業務以外では、残業時間に食べたセイコーマートのお弁当に舌鼓を打ち、借り上げ公宅の水道管を二度凍らせてしまったり、査定官が発した生「そだねー」にこっそりと興奮したりと、北海道ならではの印象的な思い出も多々あり、とりわけ1月末の休日に、苫小

牧出張所の小南さんと小笠原さんに連れて行って頂いた小樽ツアーは、真冬の北海道という滅多に体験できない時期での忘れられない思い出となりました。公私に渡り、お世話になりました道庁の皆さんにはこの場を借りて御礼申し上げます。

復旧は概ね順調に進んでいるとのことですが、復興にはまだ時間がかかるかと思えます。道庁の皆様におかれましては、これからも復興に向け業務に邁進するかと存じますが、遠くの地より引き続き応援して参りたいと思えます。

小林 与基

派遣元：新潟県

派遣時所属：新潟県土木部都市局都市整備課

派遣期間：平成30年12月1日～平成31年1月31日

平成30年北海道胆振東部地震からの復興の進展に心より敬意を表します。私は、道外からの派遣第一陣として平成30年12月から翌年1月末までの2ヶ月間携わらせていただきました。当時は災害査定受験の真っ只中であり、事務所内は深夜まで復興に向けた職員の熱気に満ち溢れていたことを思い出します。任期を終え帰任する際は、やり切った達成感と、道職員の皆様や他都府県からの応援職員の皆様と親交を深めた日々を思い返し、嬉しさと寂しさが入り交じった複雑な気

持ちになったことを覚えています。また、私が北海道生活で印象的だったのが「食の豊かさ」でした。ご当地名物を沢山紹介していただいた中で、道職員の方から仕入れていただき所長官舎でみんなで食べたジンギスカンは衝撃的な旨さでした。あれ以来ジンギスカンが大好きです。本当に微力ではありましたが、皆様とともに胆振東部地域の復興のお役に立てたことを誇りに思います。大変ありがとうございました。

上村 明弘

派遣元：新潟県

派遣時所属：新潟県魚沼地域振興局地域整備部

派遣期間：平成30年12月1日～平成31年1月31日

平成30年12月から2ヶ月にわたり携わらせていただきました。短い間でしたが、地震災害の災害査定という貴重な経験を得ることができ、大変感謝しております。

私は災害応援として査定設計書作成の製本班に配属され、設計書チェックと製本を行いました。楽そうな響きですが、度重なるトラブル（査定直前のインク切れ等）対応や、締め切りまでに仕上げなければいけな

い恐怖に、神経をすり減らしました。ただ、業務の合間に応援職員と交わした雑談（クセすず職員の話、怪談話、夢マップの話）が非常に楽しく、気分転換しながら仕事ことができました。また、一緒に奮闘した北海道の応援職員が、時間と共に晴れやかに（刑期終了?）去って行くのを、寂しい思いで見送ったのも印象的でした。

皆様のますますのご健勝をお祈りします。微々たるものですが、ふるさと納税により応援しております。

杉山 茂樹

派遣元：茨城県

派遣時所属：茨城県土浦土木事務所道路整備第一課

派遣期間：平成31年1月1日～平成31年3月31日

私は、平成31年1月から3月までの3か月間、苫小牧出張所へ派遣され、道路復旧係として災害査定の対応と実施設計書の作成を行いました。

業務は、道職員主査が全体スケジュール管理を行いながら、派遣職員に適切に仕事を配分してくれたため、指示された作業に専念でき、また、道職員と派遣職員で頻りに意見交換できる風通しの良い職場であったため、効率的に進めることができました。

業務以外でも、道職員の方々には冬の北海道での生活を教わったり、観光地を案内してもらったりと大変

お世話になりました。また、週末には派遣職員の方々とスノーボードに行くなど、充実した日々を過ごすことができました。

今回の応援業務を通して、私自身も大規模災害時の体制や対応など、多くのことを学ばせていただきました。この貴重な経験を今後の仕事に役立てたいと思います。

最後に、道職員の皆様、共に派遣職員として業務に励んだ皆様に心より御礼を申し上げますとともに、一日も早い復興を心よりお祈りしております。

中島 健太

派遣元：栃木県

派遣時所属：栃木県 県土整備部河川課県土防災対策班

派遣期間：平成31年1月1日～平成31年3月31日

北海道胆振東部地震から約3年が経過しました。被災された皆様に改めてお見舞い申し上げます。

私は胆振東部地震に係る災害復旧業務を行うため、平成31年1月1日から3ヶ月間、北海道苫小牧出張所に派遣の命を受けました。河川係に配属となり、月末には災害査定を控えているということで、管内の河川・砂防に係る査定設計書作成に取りかかりました。

当時を振り返りますと、「積算システムやCADが栃木県で使用していたものとは異なり操作に四苦八苦、また、雪に不慣れな栃木県民としては除雪の補正の考え方がイマイチ分からない、そしてとにかく寒い！！」

といった状況でした。そうした一向に設計書作成が進まない私に対して、私の何十倍も忙しいにも関わらず優しく接してくれた皆様には本当に感謝申し上げます。チーム一丸となり査定申請し、無事査定決定を受けた夜はとても忘れることができません。

3ヶ月という短い期間でしたが、多くの仲間と出会い、公私ともに充実した時間を過ごすことができました。復旧・復興には、なお時間を要することかと思いますが、関係皆様のますますの御活躍をお祈り申し上げます。

二宮 秀太

派遣元：埼玉県

派遣時所属：埼玉県越谷県土整備事務所

派遣期間：平成31年1月1日～令和2年3月31日

皆様ご無沙汰しております。埼玉県庁道路街路課の二宮です。

この度、北海道胆振東部地震の記録誌作成にあたり、コメントの作成依頼をいただきましたので、当時の思

い出について寄稿させていただきたいと思います。

平成31年1月から苫小牧出張所に派遣され、最初は道路災の方を担当させていただき、災害査定が終わったタイミングで河川災の担当に移りました。

自分の県との違いも多く、また、災害査定の真つただ中ということもあり、最初は正直「とんでもないところに来てしまったな」と感じたのを覚えています。

河川担当では、あの「土砂ダム」の工事の一部を担当することになり、仮設道路や土砂仮置きヤードの整備といった内容をメインに行いました。最初の工事ということで色々手探り状態でしたが、施工業者の方にも非常に頑張っていただき、なんとか進めることができました。自分の県では到底体験できないような規模の工事を担当することができ、とても良い経験をさせていただけたと思います。

仕事の方も充実していましたが、プライベートの方

も非常に充実しており、特にアイスホッケーについては、試合にも出させていだきいい思い出になりました。それ以外にもここには書ききれない（書いちゃいけない）思い出がたくさんでき、被災地派遣という身でありながら、毎日楽しく過ごさせていただきました。

1年3か月間という短い期間ではありましたが、ここまで濃い経験ができたのは、塩田前所長をはじめとする、北海道庁並びに災害派遣職員の皆様のおかげでした。この場をお借りして、改めて御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました！また、今後ともよろしく願いたします！

小菅 大地

派遣元：東京都

派遣時所属：東京都港湾局東京港建設事務所港湾整備課

派遣期間：平成31年1月1日～平成31年3月31日

派遣前は、土砂災害とは無縁のコンクリートで覆われた東京港の整備を行っていた。北海道の被災状況はある程度聞いていたものの、いざ現場を視察した際は、都心では体感できない自然の雄大さや恐ろしさを感じた。

実務経験3年弱（しかも港湾分野のみ）のペーパーであった私は、膨大な業務量に加え災害査定や工事起工等の期日に追われ、2時過ぎまで残業することも珍しくなかった。しかし、道職員や他県からの派遣職員のフォローのお陰で、期日までに満足のいく仕事をやり遂げることができた。

この苦難を乗り越えたのも、スノーボードやアイスホッケー、所長宅でのジンギスカンパーティ等、充実した休日を過ごしていたからに違いない。当時を振り返ると、忙しくて辛かったという記憶より、活気に満ち溢れた良い職場だった、毎週末のイベントが楽しかった等のポジティブな記憶が先に思い出される。

教えてもらうことの方が多かった3か月間だったが、順調に復興が進んでいることを聞き、微力ながらも大好きな北海道の復興に貢献できたのであれば幸いである。

作間 俊宏

派遣元：愛知県

派遣時所属：愛知県建設部建設企画課

派遣期間：平成31年1月1日～令和2年3月31日

平成31年1月から1年3か月の間、胆振東部地震の復興支援に従事させていただきました。北海道や他県から応援に来ている職員と1年間以上同じ職場で仕事をすることが出来た経験は私の中では大きな財産となっています。

主に災害復旧工事の現場を担当し、極寒の中での現場立会に心が折れそうになったこともありましたが、

一番戸惑ったのは愛知県とは異なる積算システムで、使い慣れたシステムに慣れるまで一定の期間を要しました。幸いなことにCADソフトは愛知県で使っているものと同一でありましたが、応援職員の中には積算システムだけでなくCADソフトも派遣元と異なり、積算システムとCADソフトの両方の操作に慣れるまで相当の期間を要した職員もいました。

愛知県でも南海トラフ地震の発生が危惧されておりますが、日本全国どこで激甚な災害が発生してもおかしくない昨今、積算システムやCADソフトは全国で統

一して災害発生時に応援職員を受け入れた際に、迅速な初動体制を敷く必要があると感じました。

伊藤 文善

派遣元：三重県

派遣時所属：三重県志摩建設事務所事業推進室道路課

派遣期間：平成31年1月1日～平成31年3月31日

初めての北海道が、真冬でしかも住人になるとは、想像もしておりませんでした。3月に少しずつ雪が溶け、暖かくなってきた時の「春が来た」という感動は、人生で一番でした。また、道端の砂箱、雪道の自転車走行、移動の距離感、屋内外の温度差、豊富な食材など、本当に驚きの連続でした。

さて、応援業務では、第20・21次査定の査定設計書の製本作業から当初発注の設計図書作成に従事させて頂きました。査定に分業で臨み、応援の道職員が短期

間で交代していくことに驚きながらも、当該地ならではの冬季の業務などを鑑みると、この体制であることに納得したものでした。分業や短期間の応援では、周知事項の徹底や統一感の保持がやや難しく、頻繁な交代に伴う非効率感は否めませんでしたが、やってみると工夫次第でなんとか乗り切れると感じました。

最後になりますが、関わった皆様の素晴らしい人柄に触れ、とても心温まる体験ができたことを感謝しております。

福所 誠也

派遣元：佐賀県

派遣時所属：佐賀県農地整備課

派遣期間：平成31年1月1日～令和元年9月30日

応援業務から佐賀に戻り早2年以上が経過していることに、もうそんなに経つのか、時の流れは早いなど感じています。思い返せば1月からの派遣となり、まずは気候との闘いでした。寒さには順応できたのですが、凍った路面で幾度となく転んだことはいい思い出です。

業務に関しては、災害査定の最終盤から関わらせていただきました。当初は慣れない部分もあり、遅くまで出張所に残っていましたが、温かい周囲の方々のお蔭で、やり方の異なる場でもスムーズに入っていくこ

とができました。数多く現地を見に行かせていただき、生の声を多く聞いたことや特有の問題点に対する解決策を考えていったことで知見を広げることができ、感謝しています。雪や独特な地質、規模感を含めて初めて経験する現場で、新しい考え方を随所で吸収できたことは大きな財産です。

現地のさらなる復興と、コロナ禍で北海道へ行くことが叶っていませんが、いつか再訪できる日が来ることを願っています。

木村 崇

派遣元：新潟県

派遣時所属：新潟県上越地域振興局地域整備部

派遣期間：平成31年2月1日～平成31年3月31日

新潟県から災害復旧業務支援の第2陣として、平成31年2月から3月末までの2ヶ月間、苫小牧出張所

に配属させていただきました。

第1陣の災害査定受験後から業務を引き継ぎ、工事

発注業務に携わりましたが、他県の応援職員が迅速かつ的確に業務を進めていく中で、道庁の業務スタイルになかなか慣れず、一人あたふたしながら、『災害復旧の一助となっているのか?』と悩み、過ごす日々でした。

そんな短くも長く感じた応援期間を個性豊かな苫小牧出張所の職員を始め、クセが強めな他県の応援職員に助けられながら、とても良い経験ができた2ヶ月間でした。

最後に。つかの間の休日には、ワカサギ釣りやアイスホッケー体験、ジンギスカン、おいしいスイーツの食べ比べ・・・それから、最高の仲間との最高の飲み二ケーション。

公私共に教え込まれた《北海道の魅力》を周囲に伝播し、復興の手助けとなれば幸いです。

大変お世話になり、ありがとうございました。

笹尾 郁子

派遣元：新潟県

派遣時所属：新潟県上越地域振興局妙高砂防事務所

派遣期間：平成31年2月1日～平成31年3月31日

新潟県からの派遣で平成31年2月から2か月お世話になりました。職場の雰囲気が明るく前向きで活気があり、大変気さくに接していただけたので初日から緊張もなくのびのびと仕事できました。砂防災関工の発注業務をお手伝いしましたが、わからないことも丁寧に教えていただき、期限内に発注することができたこと、また無事工事が落札されたことにほっとしたことを覚えています。短期派遣のため施工まで携わる

ことができなかったことが残念ですが、塩田所長をはじめ職員の皆さんからは災害業務だけでなく北海道の魅力もたくさん教えていただき、北海道の冬の寒さも身をもって知ることができた学ぶことばかりの2か月でした。ありがとうございました。そして災害復旧に関わった皆さま大変おつかれさまでした。あのとき発注した砂防堰堤が気になるのでそのうちこっそり見に行きます。

三浦 功誠

派遣元：青森県

派遣時所属：青森県 県土整備部整備企画課

派遣期間：平成31年4月1日～令和2年3月31日

皆様の暖かいご指導のもと、災関事業による砂防えん堤の新設、吉野地区の斜面对策に加え、日高幌内川の一部工事と河川災害復旧工事の当初設計書作成を担当しました。

1年という短い期間ではありましたが、次々に起こる様々な問題に対し、全員で解決しようとする一体感、エネルギー、実行力、そして情熱に触れ、大きなモチベーションを頂きながら過ごした新鮮で刺激的な日々は、今でも忘れられません。

仕事以外でも、当時の塩田所長をはじめ、職員の皆

様には飲み会や旅行の企画等、大変なお心遣いにより、大学卒業以来の北海道を心の底から楽しむことができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

微力ではありましたが、大変な被害に遭ってもなお強かに生きる人々の力になることができたのであれば、北海道に育てていただいた身としてこれ以上の喜びはありません。これからも、亡くなられた方々の鎮魂と被災地の実りある復興を「しょっぱい川」の向こう側から祈り続けます。

朝妻 勇貴

派遣元：茨城県

派遣時所属：茨城県土木部港湾課

派遣期間：平成31年4月1日～令和元年10月25日

私は平成31年4月から約7ヵ月間、室蘭建設管理部苫小牧出張所の道路復旧係に配属となり、路面の地割れや道路埋塞、鋼橋桁支承の破損を復旧する工事の積算・監督業務を主に担当しました。

初めて現場を見たときは、大量の崩土や倒木、所々に山積みされたガレキ等から自然災害の恐ろしさを改めて感じました。課題も山積みでしたが、塩田所長のリーダーシップにより、全国各地から集まった応援職員が迷うことなく「ワンチーム」となって業務に取り組めたのだと思います。また、寒冷地という地域特性を学びながら応援職員間で直に意見交換できたこと、

現場へ向かう際に遭遇した野生動物に癒されたことなど、一つひとつが貴重な経験であり良い思い出です。令和元年東日本台風により当県が被災、私は帰任することとなりましたが、その後も災害査定に関するアドバイスを惜しみなく教えてくださり、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

北海道での経験や共に業務に励んだ応援職員の皆様は、現在の自分の大きな支えになっており、一生の財産として大切にしていきたいと思っています。

末筆になりましたが、北海道や道職員の皆様に、一日も早く心穏やかな日々が訪れますようお願いしております。

田中 佳宏

派遣元：栃木県

派遣時所属：栃木県下水道管理事務所工務管理課

派遣期間：平成31年4月1日～令和2年3月31日

私は、平成31年4月1日から令和2年3月31日までの1年間、北海道胆振総合振興局室蘭建設管理部苫小牧出張所に応援職員として派遣されました。赴任当時は、仮設道路脇に倒壊した家屋や被災木が手つかずの状態に残置されており、被害の大きさを痛感した記憶があります。

担当業務は、道路復旧に係る工事発注や工事監督に従事しました。災害復旧工事の経験が少なく手探りの状態でしたが、道職員の方々はもちろん、任期付職員や応援職員の先輩方からのご指導を受けながら、日々の業務に取り組めました。また、プライベートでも、観

光やイベント等に積極的に誘っていただき、公私ともに充実した毎日を過ごすことができました。

1年間という短い期間ではありましたが、応援職員として胆振東部地方の復興支援に携ったことは、私にとって生涯忘れることのないとても充実した貴重な時間であり、今後の人生の糧になるものだと思います。

最後になりますが、道職員の皆様、共に災害応援職員として業務に励んだ皆様に心より御礼を申し上げますとともに、胆振東部地方の一日も早い復興をお祈りしまして締め言葉とさせていただきます。

久城 圭

派遣元：東京都

派遣時所属：東京都建設局総務部技術管理課

派遣期間：平成31年4月1日～令和3年3月31日

近い将来、高い確率で発生が予想される根室沖など海溝型の大規模地震が示されるなか、胆振・日高地方の内陸で起きた北海道胆振東部地震は虚を突かれた格

好となったのではないかと。トランス・サイエンスの領域に位置付けられ予見することが不可能といえる地震災害にあって、無数の崩落斜面を顕現させた胆振東部

地震が我々に突き付けた教訓は何であろう。

いつ、どこで発生するかわからない地震に対する備えは、経済合理性に従えば投資的性格が色濃く、どこまで対応すればいいという閾値がはっきりしない社会全体に通底する問題を抱える。有限の資源で防災と災害レジリエンスを高める考え方の転換という思惟に帰結すれば、解法を見出すため意識を収斂させる先はそれほど多くないことに気づく。

減災の依拠となる科学技術は進展してきたが、激甚化する昨今の災害に対し行政の対策だけでは限界がある。これからは防災が行政の役割という固定観念にとらわれた住民一人ひとりの意識変革に資源の重点投下が求められるのではないかと。

ロバート・マイヤーらが著書で指摘するように、人が判断を誤る心理的バイアスを理解することで、災害リスクへの備えを戦略的に構築しておくことは肝要だ。「自分だけは大丈夫」という根拠のない思い込みや、災害発生後の「想定外だった」はもはや通用しない。

被災地を目の当たりにし、自然のもたらす恩恵と災害が人間にとってもろ刃の剣であることを我が身の痛覚として知ると、VUCAに表象される予測困難な社会環境に直面している今、過去の経験に拘泥している時間はないとわかる。眼前の被害や災害対応の失敗は全ての人が自らのこととして受け止め、繰り返される自然災害のくびきから逃れる先の一手を打つべきときが来ている。

貝沼 昇

派遣元：新潟県

派遣時所属：新潟県土木部監理課

(宮城県東部土木事務所道路建設第4班派遣)

派遣期間：平成31年4月1日～令和2年3月31日

平成30年9月6日胆振東部地震発生のは、東北大震災の復旧・復興の派遣で宮城県にて2年目を迎えている時に、全国版のニュースで知りました。斜面崩壊が6,000箇所を数え、土砂が家屋をのみ込み死亡者も地震関連で40人超えとの報道に驚き、大災害はいつでもどこで起こるかわからないことを改めて痛感しました。

北海道には翌春からの派遣だったのですが、地震発生から降雪前までに現地を照査し、設計図書の作成を数ヶ月でやり遂げたのは、道職員の技術力と迅速な判

断力、特殊地形にも適確に対応されていたこともあり、スムーズに業務をこなすことができました。1年間の派遣でしたが道職員の方々と全国各地から派遣された技術職員との交流もでき、大変充実した時間を過ごすことができました。

苫小牧出張所に勤務されていた道職員の皆様大変お世話になり、ありがとうございました。今後も災害復旧・復興の経験を生かし、業務に取り組んでいきたいと思

高橋 孟

派遣元：三重県

派遣時所属：三重県 県土整備部道路管理課

派遣期間：平成31年4月1日～令和2年3月31日

北海道胆振東部地震に係る復旧・復興対策のため、三重県からは平成31年1月1日から平成31年3月31日まで伊藤文善主査(当時)、平成31年4月1日から令和2年3月31日まで私が派遣され、苫小牧出張所で道路災害復旧事業に携わりました。

赴任当時に現地へ赴いた際に、多くの斜面崩壊跡や崩土に押し流された家屋を見たときに、土砂災害の恐

ろしさを目の当たりにして言葉を失ったこと、被災地の復旧・復興はこれからであり、被災地にお住まいの方々が一日も早く今までの生活を取り戻すための業務に携わるんだと認識したことを今も強く覚えています。

道職員と都県からの派遣職員が一丸となり、災害復旧に取り組みました。私も道職員の皆様にサポートして頂き、業務にあたることができました。

道職員の皆様には業務でお忙しい中、公私共にサポートして頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。

また、北海道胆振東部地震からの復旧・復興と北海道の益々のご発展を祈念いたします。

西川 倫広

派遣元：兵庫県

派遣時所属：兵庫県 県土整備部土木局道路企画課

派遣期間：平成31年4月1日～令和2年3月31日

この災害により尊い命を失われた方に心よりのお見舞いと、今もなお復旧・復興に取り組んでおられる方に心より敬意を表したいと思います。

地震直後、膨大な量の土砂と流木に埋もれた厚真町などの被災地を見て驚愕しました。その時の凄惨な状況からすると、現在の公共土木施設の姿は「奇跡の復興」と言っても過言ではありません。

私は、地震による土砂災害は全国共通の課題であることから、復興に尽力したいと、平成31年4月から1年間、北海道に派遣されました。

派遣直後、厚真町吉野地区の土砂で押しつぶされた住家を見た時、言葉を失いましたが、同時に「迅速な災害復旧を成し遂げたい」という熱い感情が込み上げました。その後、道職員、建設業者、都県からの派遣職員が、ワンチームで災害復旧に取り組みました。私もチームの一員として、道職員の皆様に助けられ、1年間、走りきることができました。

最後に、職務遂行にあたり、道職員の皆様には大変お世話になり、改めて感謝を申し上げるとともに、北海道のますますの飛躍と発展を祈念いたします。

岩戸 悠

派遣元：高知県

派遣時所属：高知県土木部都市計画課

派遣期間：平成31年4月1日～令和2年3月31日

このたびの災害により被災された皆様、ならびにご家族の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。

私は、地震による土砂災害や液状化現象により被災した北海道を見た時、復旧・復興の役に立ちたいと思い、平成31年4月からの1年間、北海道 胆振総合振興局 室蘭建設管理部 苫小牧出張所に派遣されました。

派遣されてすぐに、厚真町吉野地区と富里地区の土砂崩れにより大量に堆積した土砂や倒木、押し流された家屋といった被災状況を目の当たりにした際に、改

めて復旧・復興の役に立ちたいと強く思いました。

それからは、高知県と違う発注システムや北海道の厳しい気候に苦勞することもありましたが、道職員・都県の派遣職員の方々の助けもあり、無事に1年間の派遣期間を終えることができました。

最後になりますが、公私にわたりご気遣いいただいた北海道職員の皆様には心より感謝申し上げますとともに、一日も早い復旧・復興を願っております。



H31.3 離職時



R2.3 離職時



R3.3 離職時

〈出典・参考資料（順不同）〉

文部科学省 地震調査研究推進本部ホームページ

国土交通省 ホームページ

国土交通省 気象庁ホームページ

国土交通省 国土地理院ホームページ

国土交通省 北海道開発局ホームページ

防衛省 自衛隊ホームページ

環境省 北海道地方環境事務所ホームページ

首相官邸ホームページ

地震による地すべり災害 -2018年北海道胆振東部地震

(2020.9.6、「地震による地すべり災害」刊行委員会編、北海道大学出版会発行)

地震災害対応マニュアル

(H8.3、北海道土木部監修、社団法人北海道土木協会発行)

〈協力・資料提供（順不同）〉

厚真町

安平町

むかわ町

公益社団法人地盤工学会

公益社団法人地盤工学会北海道支部

北海道新聞社

**平成 30 年
北海道胆振東部地震公共土木施設災害復旧事業記録誌**

令和 5 年 5 月 発行

北海道建設部土木局河川砂防課

〒 060-8588 札幌市中央区北 3 条西 6 丁目
電話番号 011-231-4111

胆振総合振興局室蘭建設管理部

〒 051-8558 室蘭市海岸町 1 丁目 4 番 1 号 むろらん広域センタービル
電話番号 0143-24-9900

一般財団法人北海道建設技術センター

〒 065-0033 札幌市東区北 33 条東 1 丁目 1 - 1
電話番号 011-711-2300

本記録誌掲載の写真・図版・報道記事などを許可なく無断で転写・転載することを禁じます。



北海道建設部土木局河川砂防課
胆振総合振興局室蘭建設管理部



一般財団法人
北海道建設技術センター

